



↑内視鏡検査室。胃の検査は右側、大腸の検査は左側のモニターを使って患者に説明する



→痔の日帰り手術の手術室。特注のライトは前後左右に動かして便利。手術台はキャスター付きで、患者を寝かせたまま移動できる

↑内視鏡検査受診者専用の待合室。落ち着いた雰囲気はティーラウンジのよう



医療法人
ただともひろ胃腸科肛門科
さいたま市南区別所7-2-1
武蔵浦和メディカルセンター202
TEL: 048-837-9333
FAX: 048-837-9292
URL: http://www.musashirawa.jp/ichoka/
診療科目: 胃腸科、肛門科、外科



↑患者の利便性を考慮し、待合室から廊下一つ隔てて5つのトイレが並び



医療法人 ただともひろ胃腸科肛門科

(さいたま市南区)

小回りが利くからできる最先端医療 無痛・安全・高精度で集患に成功



「最新の治療法を取り入れられるよう、日々アンテナを張っています」と話す多田智裕院長

注目POINT!

① 大学病院を超えた最先端の医療の提供を目指す

最新鋭の医療機器を導入し、「無送気軸保持短縮法」による大腸内視鏡検査や、痔のジオン注硬化療法など最先端の検査や手術をこなす。

② あえて専門を絞ることで幅広い集患に成功

経鼻胃内視鏡検査、大腸内視鏡検査、痔の日帰り手術に特化することで、開業わずか3年で年間4,000件以上の検査数と500件近い手術数を達成。

③ 内装や医療安全対策で患者本位のサービスを追求

診療の特性に合わせ待合室の隣に5つのトイレを設置するなど、院内レイアウトを工夫。専用の内視鏡洗浄室も設け、院内感染対策を徹底した。

年間4000件超の検査数 高レベルの痔の手術も人気

「専門に特化した開業でも、成功することを示したかった」と話すただともひろ胃腸科肛門科の多田智裕院長。最近の開業傾向として、医療サービスの種類を増やして幅広く集患を図るパターンが多いが、同院は逆に内視鏡検査と痔の日帰り手術にこだわることで、大勢の患者が全国から訪れる。

胃と大腸の内視鏡検査は合わせて年間4200件と、大学病院クラスの平均1000件を軽く超える。2006年7月の開業以来、痔の日帰り手術数は早くも1000件に迫る勢いで、埼玉県内では他院の追随を許さない。

口コミで次々と患者が増えるのは、最新鋭の医療機器と高い技術があるから。経鼻胃内視鏡検査は先端がわずか4・9mmという超極細の内視鏡を鼻から挿入するため、患者は嘔吐感をほとんど感じない。大腸内視鏡検査は「無送気軸保持短縮法」という、国内でも習得している医師が数少ない技術を使う。大腸の奥に内視鏡を挿入する際に空気を全く入れないため、一般的

なルーブ挿入法に比べて検査時間が短いうえ痛みがほとんどない。「大学病院の勤務医時代から、肛門科を専門とする以上、検査における患者さんの痛みを軽減したいと考えていました。開業は理想の医療を実現する手段の一つでもあります」と多田院長。

痔の治療には従来の患部を切る手術ではなく、患部を固めるジオン注硬化療法（ALT療法）を採用。ALT療法は切った際の痛みや出血もなく、ほとんどの症例では入院も必要ないが、医師の高い技術が要求される。

「開業したら最先端の医療とは縁遠くなる、と勘違いしている勤務医の方もいらっしゃいますが、決してそんなことはありません。むしろ、小回りの利く診療所のほうが、機器や技術を更新しやすい」と言う。

内装に結晶した院長の思い 非常勤医を8人もそろえる

同院はJR埼京線と武蔵野線が交差するさいたま市南区の武蔵浦和駅から徒歩4分、9つの診療所が入居する国内最大級の医療モ

でスタッフの動きやすさを実現。一般患者と手術・検査の受診者が顔を合わせないよう、患者の動線も工夫した。「働く環境を自分の判断で決められることが、勤務医にはない開業の面白さです」

看護師7人（常勤4）、医療事務6人（常勤5）と、スタッフの厚い体制も特徴の一つ。常勤医は院長1人だが、非常勤医は東京大学医学部附属病院の後輩らが8人と、診療所としては破格の人数をそろえる。「余裕がないとベストな診療はできません。経営者として『人材に投資をする』との発想が大切ですよ」と言う。

院内感染予防のために、内視鏡検査の処置器具はすべて使い捨てで、内視鏡自体は専用の内視鏡洗浄室で毒性のない過酢酸（アセサイド）で消毒する。消毒にこれだけコストをかけている医療機関は、大学病院クラスでもほとんど見当たらないという。

「患者さんの満足のために、できることはすべて実現した。これならどこにも負けないという技術、内装、機器、スタッフをそろえることで差別化が図れます」と胸を張る。